

「カジっていいですね、なんじゃあおめえじょじか？」

携帯電話のない時代、同級生の女子との連絡は家電（いえでん・家庭の固定電話のことだ）にかけるのが普通だった。しかしそれは普通であって、普通ではない。「親が出る」というバッドシナリオ、そして「娘とはどういうご関係ですか？」という、法廷さながらの質問も待ち受けているのだ。家電にかけるときは命がけ、どんな状況になろうか動じぬよう、シミュレーションを十分重ねてから全身全霊でダイヤルを回さなければならぬ。「夜8時ちょうどに電話するから」と伝えておいたのに決まって親御さんが出る。このパターンを何度繰り返したことが、こんな時代であるから、当時の恋愛事情はビュアそのものだった。彼氏彼女がいるのは少数派であり、交際は美にプラトニックなものであった（と信じたい）。

さて、事件は高校の修学旅行初日に起こる。その日、クラスのまじめ男子である久留米君がある女子に告白するらしいという怪情報が、まことしやかにささやかれ、なぜかクラスの男子のほとんどがそのことを知っていた。

そして、神戸ポートピアランドの自由時間、情報どおり彼は告白をした。結果はというと、告白の言葉に食い気味の「ごめんなさい」であった。合掌。彼が振られたという情報は、瞬く間に広まった。

その夜。夕食後に風呂に入り、10人ほどの布団が敷ける大部屋に戻ると、久留米君を囲んでクラスメイトがなにやらやっている。振られた彼を慰めていると思いきや、ひとりの男子が自らの財布から千円札を取り出し、

「ファイトマネー!!」

と叫びながら床に叩きつけたのだ!

「スっ!!」

取り囲んでいる他の男子も「ファイトマネー!ファイトマネー!」と続き、みるみるうちに千円札が久留米君の前に積まれていく。ホクホク顔でファイトマネーを回収する久留米君。

それは格闘技のように挑戦者に報酬が与えられるという、驚愕の告白システムであった（ちなみに成功した場合はノーマネーでフィニッシュ）。

試合後彼は「うまくいかないはないは二の次、ファイトマネーほしさに告白した」と語ったが、旅行中終始作り笑いで過ごしていた彼の姿を目の当たりにして、高校生なりのビュアな失恋を見た気がした。今は昔のものがたり。

華麗なる図書館利用者のための

Cool Librarian

カールリブラー講座

カジのうら若き青春黙示録

文/カジ

バナナはおやつに入りますか？

バナナがおやつに入るかどうかは、そのバナナがどのようにカテゴライズされて持ち運ばれたかがポイントとなる。お弁当箱に入っていたならお弁当、おやつ袋に入れていればおやつという扱いにするのが一般的だ。では、チロルチョコがお弁当箱に入っていたら、もしくはおにぎりの具として使われていたとしたら、それもまたお弁当としてみなすべきだろうか。さらに、ジャイアントカブリコがおにぎりの具だったらどうか。このように突き詰めていくと、様々な矛盾が生じることとなる。よって、バナナがおやつに入るかどうかについては、敢えて結論を出さないのが妥当であり、最も平和的であるといえる。